

リスクと「統治性」：米国非正規滞在者の排除と処罰

TANAKA, Kennosuke / 田中, 研之輔

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

103

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007383>

リスクと「統治性」 —米国非正規滞在者の排除と処罰

法政大学キャリアデザイン学部専任講師 田中研之輔

監獄をその中心にもつ刑罰制度は、その制度と共に循環する人々のカテゴリーを生産するのである。監獄は矯正しない。監獄は休みなく同一の人々を呼び戻す。監獄は徐々に周縁化された人々の集団を構成する。そして、「不規則行為」あるいは「違法慣習」に圧力をかけるために、この集団は利用されることになるのだ⁽¹⁾。

監獄という制度は、多くの人にとって氷山のようなものです。表に見えている部分は、「犯罪者がいるから監獄が必要なのだ」という正当化です。隠れている部分、それが大部分で、最も恐れるべきものなのですが、それは監獄は社会的な抑圧手段だということです⁽²⁾。

1. リスクと「統治性」

大規模な農民一揆や都市暴動などの集合的な群衆行為は、日常的な平穏を維持する統治を転覆させることで噴出する非日常的な社会的事象である。あるいは、地震や洪水、大規模な自然火災などの天変地異もまた、日常的な統治を無効化させる。人工的であれ、自然発生的であれ、日常の秩序維持機能を転覆させたり、無効化させる危険因子を予見し、対処するのにリスクアセスメントやリスクマネジメントが用いられる。具体的にここでのリスク分析は、集合的な人びとの集まりの平穏状態の維持、別言すると「人口の統治」を問題視している。この「人口の統治」の問題について、フーコー（2000）は主権と規律を

より先鋭化させていくものであると捉えている。「主権—規律—統治的管理」（フーコー、2000、p.269）の三項がともに人口を標的にして、治安維持をはかっていく。この人口を主要な標的とし、治安装置としての権力形式を行使させるのが「統治性」である。この統治性とは、「諸々の制度、諸々の手続きと分析と考察、計算、そして戦術からなる全体」（フーコー、2000、p.270）をさし、人口の統治をめぐるリスク分析的理解と共通性をもつ。

本論文では「統治性」がリスクとどのように接続点を持ち、いかなる権力が日常空間で行使されているのかを明らかにしていく。だが、リスクは「人口の統治」の問題のみに収斂しない。その前提として、まず、現代的に用いられ、理解されているリスクについてその種別を分類していくことにしたい。次に、本論文の対象として扱う米国の非正規滞在移民の事例をリスクの種別に整理した上で、その内実に迫っていく。

2. リスクの種別

リスクとは、肉眼で実体的に捉えられるものではなくて、科学的判断・基準に基づく、ある規範的な見方によってリスクであると認識されるものである。つまり、リスクとは、①所与のものとして存在するのではなく、科学によってつくられるものである（ベック、1998、p.356）。この科学的認識によって顕在化されるということと同時に重要なのが、リスクとは②「現状で推定しうる諸々の被害を予測する（ベック、1998、p.46）」、言わば、「未来の分析・予測」であるということだ。もともとは、危険だと認識されていないものが、将来引き起こすであろう可能性を一定の科学的手続きによって算定し、問題化されることで、リスクとして社会的に認識されるようになる。「近代化に伴うリスクが科学化の対象となることによって、潜伏していたものが顕在化してくる」（ベック、1998、p.314）のである。

本論文においては、リスクとは、「人（個人）が行った行為や人間（集団や環境）が生み出し社会が内包する要因／によって被る損害（damage）の可能性・確率を科学的な判断基準によって規範化されたものであり、事故や災害など事故が責任を負いきれない出来事を現す危険（danger）や人間の力では避けることのできないハザード（hazard）とは異なり、自己の責任において引

き受ける危険」⁽³⁾と捉えることにしたい。

規範的な判断に基づき、①「リスクとは、計算不可能であるにも関わらず、科学の中でつくられ」（ベック、1998、p. 356）、②将来においてもたらされる潜在的な危険性—ベックの言葉でいうところの「潜在的副作用」—と認識されることで、「リスクは現実化され、リスクそれ自体が正当化される」（ベック、1998、48）ことになる。

もちろん、このリスクに関する科学的判断のもう一面では、同時に、「リスクを否定し、リスクを知覚しない」（ベック、1998、p. 69）ようにする、ある対象におけるリスクの非現実化の判断も下される。だが、「技術的なく安全>と社会的なく信頼>によって、人びとの<安心>を形成させようとする」⁽⁴⁾中で、①一般環境汚染、②労働環境整備、③地球規模環境汚染、④原子力発電所、⑤食品の安全性、⑥食糧危機、⑦健康リスク、⑧疾病予防の多岐にわたって、科学的基準に基づいたリスクの顕在化、現実化、正当化が行われているのが、昨今の社会的風潮であることは疑いない。

現代社会においてリスクは否定され、知覚されない対象ではなくて、その「潜在性」や「未来性」において、議論の余地のないほどまでに、徹底的に「認識され、科学的につくられている／つくられていく」のである。それにより、「リスク社会とはたんにリスクが増大しているだけでなく、それ以上に、リスクに対して敏感になった社会をあらわす」（今田、1997、p. 1）ことになるのである。

有害物質、自然破壊、環境破壊に関するリスクの認識は、工学、生物学、環境科学等の自然科学的上の分析基準でもって判断される。そのときに、リスクがもたらすであろう、損害をいかに回避、削減、減少させるかというリスク・アセスメント、マネージメント的視座が重要となる⁽⁵⁾。

本論文で後に取り上げるのは、米国非正規滞在者の排除と処罰をめぐるリスクである。上記のリスク種別に基づく、①社会的なリスクに分類される、中間（集団）領域の問題であるメゾスケールのリスクであり、②生物学、環境科学等の自然科学的上の分析基準でもって判断しにくい対象であり、なおかつ、③損害をいかに回避、削減、減少させるかというリスク・アセスメント、マネージメント的分析も適合しにくい対象である、「他者」との関係性が問われ

リスクによる 損害の評価、管理、対話、決定のサイクルー（Assessment）→（Management）→（Communication）→（Judgment）

	リスクの科学的認識と社会的対応の手続き
リスク評価（Assessment）	リスクの大きさを科学的に評価する作業
リスク管理（Management）	リスク評価の結果をもとに管理策の技術的な可能性、費用対効果などの複雑な連関要素から策定
リスクコミュニケーション	リスク管理策の有効性について関係者の承認と信頼を得るための対話
リスク決定（Judgment）	利害関係者の対話後のリスクに関する意思決定

リスクの種別⁽⁶⁾

	リスクのスケール		
	ミクロ	メゾ	マクロ
自然環境のリスク	火災・局地豪雨・水害	地滑り・噴火・酸性雨・森林破壊・空気汚染	地震・洪水・干ばつ・竜巻・温暖化
生活環境のリスク	飢餓・病気・怪我・障害・精神疾患・医療ミス・遺伝子操作	食中毒・公害	風土病・伝染病（天然痘・マラリア・インフルエンザ・ペスト）
経済的なリスク	失業・自己破産・長時間労働・労災	失業・食品表示の偽装・産業廃棄物	企業倒産・通貨・金融・財政危機・市場取引の激変
政治的なリスク	民族差別・「人種」偏見	暴動・民族紛争・化学・生物兵器による大量殺戮・	クーデター・社会プログラムの機能不全
情報のリスク	個人情報漏洩・有害情報・ネット有害サイト	企業・組織内外の情報漏洩	サイバーテロ・監視・風評被害
社会的なリスク	個人犯罪・家庭内暴力・ストーカーの暴力被害・幼児虐待バワハラ・セクハラ・薬物中毒・	テロ集団・非行集団・出会い系サイト・援助交際・非正規滞在者・野宿生活者	内乱・戦争・核

るリスクである。

3. リスクと「他者」

領土的・制度的・文化的な次元において他国家と隔離・断絶できないかぎり、国家は存立と同時にその＜内外＞に絶えず＜他者＞を抱え込む。国家は

＜内なる他者—麻薬中毒者、精神疾患患者、売春婦、犯罪者、（近年では、貧しき者）など＞を、隔離地区、収容所、刑務所といった一定の物理的・象徴的な限定空間へと閉じ込めることが、ひとまず、そのリスクを軽減・回避する最善策であることを共通了解にしている。だが、それが＜他者＞というカテゴリーの再強化をもたらすきわめて暫定的で脆弱な統治の技法にはかならないことをわれわれは限定空間が刻み込んできた歴史から学んでいる。

また、＜外なる他者—暴徒、（潜在的な）テロリスト、（非正規資格で流入する）移民など＞にたいしては、領土的・制度的な「ボーダー」でその＜境界＞を超えないように監視・管理を徹底的に強化する。しかし、＜外なる他者＞こそ国家の上からのコントロールを無効化・無益化する術を身体化し、実践的なネットワークを構築している巧者である。強制送還で母国へと送り返した＜他者＞がその数ヵ月後にふたたび、国内へと流入してくる多様で巧緻な「移動」を断ち切ることはできない。

国家は＜内なる他者＞も＜外なる他者＞も排除しえない。にもかかわらず、＜他者＞というカテゴリーを過剰に煽りたて、一定の空間的範囲内への隔離と「見せしめ」の制裁・処罰によって、この排除しえない＜他者＞をあたかも統制できているかのようにふるまうことも国家には最低限求められるのだ。

本論文では、報告者が現地でフィールド調査してきた米国での非正規滞在移民の労働現場と米国の刑罰化を素材としてリスクと「統治性」について考察を深めていく。本調査は、米国・サンフランシスコ郊外で2006年6月から2008年3月までの18ヵ月間、非正規滞在労働者の日雇い現場で筆者自身も労働者の一人として通った観察参与をもとにしている。その後、2009年8月～9月には現地滞在追跡調査を行った。

4. リスクと「統治性」—米国非正規滞在移民の事例

＜他者＞との関係性が問われるリスクについて、誰にとってのどのようなリスクであるのかという評価・判断を分節しながら検討していくことにしたい。非正規滞在移民（Undocumented Immigrants）の事例を考える時、①国家におけるリスク、②地方行政におけるリスク、③地域住民におけるリスクというように、非正規滞在移民という＜他者＞をリスク要因と捉える見方と、④非正

108 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

規滞在移民にとってのリスク、言わば、＜他者である当事者＞が自身の存在やとりまく環境をどのようにリスクとして捉えているかの双方から考えていかねばならない。

米国には現在約1200万人を超える非正規滞在者が居住しており、その55%が非正規入国者であり、残りの45%は超過滞在者である⁽⁷⁾。この45%にあたる滞在者は、正規ルートで入国し、その後滞在期間を超過して滞留することで、非正規滞在者となるもので国家の入国管理策などで入国をコントロールすることはできない。非正規滞在移民の57%がメキシコ、23%がメキシコ以外のラテンアメリカ諸国からの入国であり、陸路での入国が可能であることもこの人口増の一要因である。残りの10%がアジア、5%ヨーロッパ、カナダ。5%がそれ以外の地域⁽⁸⁾からの移民である。

これら非正規滞在移民人口が年々増加し、肥大し続けていることも米国の特徴である。この肥大し続ける非正規の人口集団をいかに統治していくか、この点が①国家におけるリスクとして認識される。統治国家とは、「人口集団によって定義され、諸々の治安装置によって管理された社会に対応する」（フーコー、2000、p. 271）⁽⁹⁾のであり、いかなる治安装置によってこの人口集団を統制していくかが問われるのである。この統治国家において、人口を管理するということは、「単に諸々の現象の集団的集積を管理することでも、現象を全体的な結果のレベルにおいて単に管理することでもない。人口を管理するとは、人口を深部において、繊細に、細部にわたるまで管理することなのである（フーコー、2000、p. 268）。」その国家の人口統制の代表的な管理組織が、学校、職場、軍隊、病院などの規律・訓練組織であるが、無身分証明、無健康保険、無運転免許の3重の＜無＞を強いられる社会的存在である非正規滞在移民はこれらの組織には帰属しない。そうであるがゆえに、非正規滞在移民は統制装置としての国家にとって＜他者＞であり続ける。

国家にとっての＜他者＞の集合的存在は、地域住民から寄せられる公衆衛生上の問題に対応する②地方行政におけるリスクとして浮上する。本調査では、2007年8月10日に、高架下の空地で野宿生活をしていた労働者の所有物である毛布等の寝具や食事用の簡易コンロ等を撤去させる撤去通告が通達された。その後、その通達を守らずにいた労働者達が路上で仕事待ちをしている日中に、

所有物は完全に撤去された。しかしその後、野宿生活をする日雇い労働者の寢床をめぐる具体的な対応策として、宿泊施設を提供することもなかったため、数日して労働者はまたその場所に戻ってきている。

より日常的なレベルでの〈他者〉へのリスクは、③地域住民にとってのリスクとして、「グロテスクな集合的な身体」へのまなざしとして可視化される。筆者が彼らと一緒に歩くようになって何度も遭遇したのが、彼らの存在に対する社会蔑視であった。すれ違い様や道路の反対側の歩道から「肌の色」や塗装のペイントや建設作業現場での汚れたままの服装や傷んだ靴などの外見的な「汚らしさ」に対して暴力的な言葉が投げかけられる。そうした発言に対して、日雇い労働者達は言い返すこともない。なかでも、ビールの買い出しに向かっていた途中に、中年の白人女性がすれ違いざまに、「邪魔だから、はやく、国に帰れ」と吐き捨てた。その女性は、自分を含めて6人の日雇い労働者が、歩道を占有するように歩いていたことに腹を立てたようであった。その際にも、言い返すようなこともなく、ペドロが、「いいんだよ。ほっとけば。俺らは、ブラウンカラーだから、仕方ないのさ」と小声で話したところにアメリカ社会で生きていくことの内実が伺いしれる。メアリー・ダグラス (Douglas, 1992) が文化・象徴的アプローチを用いて述べるように、「他者」とは、ある特定の社会集団——とくに、周縁化され、スティグマ化された「リスクイ」な他者——に推定されるリスクによって生起する不安や恐怖 (Lupton, 1999, p. 124)⁽¹⁰⁾。スティグマ化され、周縁化された社会集団が、「潜在的なリスクを持つ」と認識されることで、統制・監視・規律の対象とされる。ここで「ブラウンカラー」とは、南米系の特有の茶褐色の肌色を示す視覚的なカテゴリーとしてだけでなく、ホワイトカラーやブルーカラーといった職種によるカテゴリーとは異なる社会蔑視を内包した新たな社会階層区分として、生活空間のなかに認知されつつあるのである。

それゆえ、野宿生活をする日雇い労働者に宿泊場所を提供することや、職業機会や食事の提供など総合的な社会的な支援を提供していくことによる生活環境の改善が求められている。それと同時に、彼らの社会的存在に日々浴びせられる社会的差別や蔑視の現状を直視していかなければならない。

次に、④非正規滞在移民にとってのリスクをみていくことにしたい。野宿生

活をする日雇い労働者の生活圏は、基本的に徒歩で移動できる地理的範囲になる。もちろん、バスや高架鉄道などを利用することも可能であるが、毎日数ドルの移動の経費がかかることは避けている。彼らと一緒に散歩くことを繰り返していると、教会、無料で診察してもらえる医院、格安の日常雑貨店等、生活に不可欠なものは一通り揃えることのできる彼らの生活マップが浮かびあがってくる。そして日常的な生活のなかにリスクが埋め込まれていることも明らかになってくる。

非正規の日雇い労働者にとって深刻な問題であるのが、1) 健康上のリスクである。アルコール依存症、大麻・クラックによる薬物中毒、糖尿病、過度の腰痛、歯痛、痺れと健康上に問題を抱えながらも、健康保険を所持することができず、病院に通うことができない。月に一度 NPO の支援団体による無料健康診断があり、スペイン語での受診が可能であるものの、その後一時的な処置以外が施されない。また、国家にとって統制組織の外部に存在する<他者>のリスクが同じく、非正規滞在者たちの<当事者>においても問題となる。

そこで、2) 諸組織の外部に存在することのリスクであり、非正規滞在者の多くが、家族、学校、医療、地域とは分断された中で日々を過ごしている。43歳のメキシコ人单身男性フェルナンドは、「国境を越える前、俺は、アメリカにはチャンスがあって、仕事をみつけて、家族をサポートできるようになるって思っていたのさ。でも、いま、俺は、ホームレスだよ。酒だって、毎日、浴びるように飲んでいる。仕事も見つけれない。いったい、俺は、ここで何をやっているのかわからないんだ。この先、チャンスがあるとも思えない。この3年、家族と連絡すらとってないのさ。(フィールドノーツ 2007.9)」と述べる。このように、出稼ぎ労働を手段として、母国に滞在する家族への送金を入国の目的としていたのだが、その目的を継続的に達成することは難しく、家族との連絡を取らなくなるような事態も起きているのである。

そうした生活は、そもそもに3) 経済的なリスクを抱えている。34歳メキシコ人のロペスは、「今日もいつもとかわらない。仕事はないね。仕事がないのは、別に、俺だけじゃない。俺は、朝8時から今の16時30分まで、仕事をここで待っているんだ。明日、来たって、仕事はないさ。でも、そうするしかないんだよ、これも俺の人生なんだよ。ここにきて、ただ、待つんだ。一日中、こ

こにきて、仕事を待つことが仕事だって思うときすらあるのさ。(フィールドノート、2007.7)」と仕事を待つことが仕事である労働の実態を吐露した。私の日雇い労働現場の労働調査では、労働者の月収は平均に300ドル以下であった。時間給は12ドルから14ドルが相場であり高額な印象を受けるが、労働の待機時間と総月収から算出した実質的な時間給は、1.2ドルである。

4) 労働現場では、不適応な待遇を受けるリスクを抱えている。33歳メキシコ人ルイスは、「ここで仕事を待っている奴らはみな、仕事や賃金に対して不満を持っているさ。もちろん、俺だってそうさ。俺たちを雇う奴らは仕事の内容や賃金について騙すこともあるしな。そんなことは日常茶飯事さ。奴らは、俺らのことをなんとも思っていないのさ。俺たちを獣のように扱うのさ。奴隷のような気分さ。仕事を終えて、雇い主が車の座席の上に現金の投げ捨てることもあるのさ。なぜだか、わかるか。俺の手すらも触れたくないってことなんだよ。俺が病気かなにかを患っているのだと勘ぐっているのさ。雇い主が何を言っているのかは理解できる。何か言わなければならないときには、英語を話すさ。そうでなければ、雇い主とは話したくもないのさ。だから、英語を話せないふりをしてただ仕事をこなすのさ。(フィールドノート 2008.9)」と述べる。さらに、より直接的なものが、5) 身体的なリスクである。路上での暴行行為を受けやり、夜間に奇襲被害を受けることも少なくない。この暴行を発生させる理由は明確で、非正規滞在移民であることの法的な「弱み」につけこんだ暴力行為である。

非正規滞在の身分で生活していくことは、生活の全てにリスクが埋め込まれているといっても過言ではない。日雇い労働者達と公園で、タコスとスープを調理し、夕食をとっていると、マウンテンバイクタイプの自転車にのった警官がやってきて、公衆での飲酒に関する罰金のチケットを1人に与える。本調査の労働現場に集まる150名のうち、9割以上が米国での収監歴を持つ。なかには、10数回と収監を繰り返す労働者もいる。具体的には、6) 刑務所への収監のリスクから逃れることはない。

場合によっては、7) 強制送還されるリスクもある。メキシコ出身のアルベルトは、正規の滞在資格を持たない社会的境遇で過去数年もの間、米国で暮らしてきた。就労形態も制度的に保障されたものではなく、雇用者と労働者が路

112 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

上で口約束をして現場に向かうインフォーマルな日雇い労働であった。事故を起こしたとき、アルベルトは数日間連続して雇用されていた。このようなまとまった仕事にありつけることは非常に幸運なことであった。だが、この追突事故でアルベルトはようやくにして掴んだ労働の機会を手放してしまうことになる。事故を起こして逃走しているからといって、アルベルトには逃走資金もなければ、そもそも逃げゆくあてもない。アルベルトはその後、いつものように路上で仕事待ちをして、夕方以降はパブリック・パークに設置されているバーベキューコンロで温めたタコスを頬張り、労働者の仲間と酒を飲み、そのまま近くの雨風を凌げる高架道下の空き地で野宿生活をしていた。数日後、仕事待ちストリートに数台の警察車両が乗り付け、アルベルトは連行されていた。アルベルトは数ヶ月間刑務所に収監され、その後、メキシコに強制送還された。しかし、その数ヵ月後に、再び、日雇い労働現場にアルベルトが姿をみせる。

このようにみえてくると、現代米国社会の事例で確認できる刑罰的監禁によるリスク要因排除の技法が、フーコーがすでに明らかにしていた17世紀中世社会の＜四重の排除方式＞と共鳴することが理解できよう。まとめると、（１）労働や生産関係との関わりで生じる排除、（２）社会の構成員の再生産過程としての家族との関係における排除、（３）言葉、象徴の生産とその流通における排除、（４）＜遊戯＝現代的には、個人のレベルで一時的かつ人工的に作られる（アルコール依存や麻薬中毒等による）個人的な祭り・狂気→（反一遊戯）＞との関係における排除、からなる＜四重の排除方式＞である（p.66）。

5. 結び：リスク社会における「他者」の排除から処罰へ

本論文で検討した米国非正規移民の事例は、中間（集団）領域のメゾスケールで、自然科学上の分析基準では考慮しにくい、「他者」との関係性をめぐるリスクとして位置づけられる。本事例で検討した「他者」との関係性をもとに、リスクと「統治性」について次の三つから明示しよう。

第一に、統治国家は、人口統制の外部で集団を形成していく＜他者＞である＜集団（マス）＞をリスク要因と認識し、排除していく。ベックは、「個々人の社会的移動によって不平等が解決されたわけではなく、むしろ、個人化をもた

らし、社会問題が心的性向の問題へと変わっていく」(ベック、1998、193)と述べている。この「個人化の効果的な手段」として刑罰的監禁が行われる。国家的対応としては、主に、二つあり、①医療的対処法として、他者集団を新たな社会的範疇にカテゴリー化、精神病患者などのようにして専門医療施設へと囲い込む。そして、もう一つが、本論文でも取り上げた現代米国の事例にもみられるように、②刑罰的監禁である。収容監禁施設の増設と警察組織の強化の同時進行させ、他者（とくに、貧者として公共空間にその身体を露呈するもの）であるものを犯罪者化していく。

この点に関して第二に、リスク要因とされる<（集合的な）他者>への統制方法が社会からの排除から処罰へとその強度の強まりを指摘できよう。今や周縁的な存在にある集団は、物質的にも、個人の生存においても社会から締め出される（フーコー、2000、p. 70）。「貧者を罰する」ことをリスクの対応策とする社会が到来してきている。人口を統制する統治の目的は、「統治が導くプロセスの完成、最適化、強化の中に求められるべきものであり、統治の道具とは、法律ではなく、様々な戦術であり」（フーコー、2000、p. 260）⁽¹¹⁾、この「様々な戦術」のなかには、①地方行政の「他者」への日常的な対応、②労働現場での雇い主からの差別的待遇、③生活領域での地域住民からの社会的蔑視、④さらには、「他者」であることの集合的心性等、が相互に関連するようにして組み込まれている。様々な管理施策によって支えられる統治国家のリスク管理は、その厳密な意味において、「人口集団の統治」であるだけでなく、より細部で生活領域における「他者」との関わり方、さらには、「他者」として生きることの心性にまで刻み込まれるようにして、施されている。

そうして第三に、「他者」の統治技法が超国家的に伝播していく。米国での「他者」の<統治>技法が、メゾスケールの社会的リスクの対処法として国家を越えてグローバルに伝播していく。リスクと「統治性」をめぐる浮き上がる、米国の刑罰国家化が統治技法として世界諸国に着実に浸透しつつあるのである。

[注]

- (1) ミシェル・フーコー 思考集成Ⅳ p. 486

- (2) ミシェル・フーコー 思考集成Ⅳ p. 70
- (3) ウルリッヒ・ベック (1998)『危険社会—新しい近代への道』東簾・伊藤美登里訳、法政大学出版会。橋本俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹編「リスク論からリスク学へ」『リスク学入門1』岩波書店、2007、p. 12。
今田高俊「リスク社会への視点」橋本俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹編『リスク学入門4』岩波書店、2007、p. 3。
- (4) 日本学術会議 安全とリスク分科会「リスクに対応できる社会を目指して」(2010.4.5.) p. ii。
藤田弘夫・浦野正樹編 (2005)『都市社会とリスク—豊かな生活をもとめて』東信堂
- (5) このときに損害以上のより大きなリターンをもとめて、積極的にリスクを冒すという価値基準も共存することは忘れてはならない。
- (6) 「リスクに対応できる社会を目指して」(2010.4.p.4) の表「社会的リスクの種類」、藤田・浦野編『都市社会とリスク』(2005) 東信堂、橋本俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹編「リスク論からリスク学へ」『リスク学入門1』(2007) 岩波書店をもとに報告者が作成
- (7) Pew Hispanic Center. “Modes of Entry for the Unauthorized Migrant Population.” May 22, 2006.
- (8) “Undocumented Immigrants: Facts and Figures.” Urban Institute. January 2004. Accessed June, 2006 at <http://www.urban.org/publications/1000587.html>.
- (9) 石田英敬訳「統治性」『ミシェル・フーコー思考集成 VII知／身体』(2000) 筑摩書房。
- (10) Douglas, Mary. 1992, Risk and Blame, Essays in cultural theory, Routledge. Lupton, Deborah. 1999, Risk, Routledge.
- (11) 筆者による一部修正訳

*なお、本研究は日本証券奨学財団の平成21年研究助成「新自由主義国家の刑罰論的転回に関する国際比較研究」の成果である。記して感謝したい。

ABSTRACT**Risk and “Governmentality”****Social Exclusion and Punishment of Undocumented Immigrants in the US.****Kennosuke TANAKA**

The meaning of the “risk” has changed from a neutral term, concerned merely with probabilities, with losses and gains, to a negative or undesirable outcome, and as such, is synonymous with the terms danger and hazard (Fox, 1999). Some risk theories and perspectives is offered by the several theorists who have taken up Michel Foucault’s writing on governmentality to “explore the ways in which the state and other governmental apparatuses work together to govern—that is, manage and regulate—populations via risk discourses and strategies (Lupton, D, 1999).”

In this paper, rethinking of my ethnographic data, narratives and conflicts at the sites where I have been conducting an informal day labor site located near the eastbound I-80 on-ramp to San Francisco since 2006, I will discuss the multi-levels relationship between risk and “governmentality”.